【学会報告】
第13回 新プラトン主義協会大会

水落 健治

2006年9月16日(土)〜17日(日)、第13回新プラトン主義協会大会がキリスト教研究所の共催で白金校舎で開催された。

「新プラトン主義」Neoplatonismus とは、紀元3世紀のローマで活躍した哲学者プロティノス(c.205-270) を創始者とするギリシア哲学の一派で、プラトンの哲学を基盤としながらもその上に独自の思想を展開させ、〈一者〉からの万物の流出と〈一者〉への帰還を説く壮大な形而上学を構築し、後世に絶大なる影響を与えた思想の一潮流である。その影響は極めて広範囲に及び、(1) 中世西欧の流れを決定づけたアウグスティヌス、中世の時代に「使徒パウロのアレオパゴスでの説教で回心した聖人」 (cf.使徒言行録 17.34) とみなされ東方キリスト教思想の根底を形作った6世紀の偽ディオニュシオス・アレオパギテース、トマス・アクィナスなどのキリスト教の思想家、(2) マルシリオ・フィチーノ、サンドロ・ボッティチルリなどのルネッサンスの思想家や芸術家、(3) ヘーゲルなどのドイツ観念論の哲学者、さらには (4) イギリスの詩人 W.ブレイクやドイツの詩人 R.M.リルケなどが、新プラトン主義の影響のもとに自らの思想を展開し、創作活動を行った。かかる影響の大きさのゆえに、近年、この思想の重要性がいたるところで再認識され、日本では滋賀大学の水地宗明名誉教授、金沢大学の岡崎文明教授らの呼びかけで「新プラトン主義協会」が15年程前に設立された。新プラトン主義協会は、現在設立中の「国際新プラトン主義学会」の正式な日本支部と位置づけられている。

第13回新プラトン主義協会大会は、「ルネッサンス思想と新プラトン主義」をメイン・テーマに開催された。参加者は50名以上にのぼり、内容的にも参加者の面からも非常な盛会であった。プログラムは以下の通りである。

9月16日(土)

プロティノス・コロキウム

今 義博 (山梨大学)

シンポジウム
「新プラトン主義とルネッサンス思想」
提題 : 「15-6世紀のプラトン主義
——フィチーノと彼以降の世代の哲学者」
根占 献一 (学習院女子大学)

「ピーコ・デッラ・ミランドラにおけるプラトン主義 ——『自然と人間』という観点から」
大貫 義久 (法政大学)

「ジョルダーノ・ブルーノにおける新プラトン主義」 加藤 守通 (東北大学)
司会 : 加藤 守通 (東北大学)

9月17日(日)

研究発表
「初期リルケと新プラトン主義との出会い
——創造と芸術の視点をめぐって」
水落 美也子 (ミュンヘン大学)

研究発表「プロティノスにおけるコスモスに関する政治思想史的考察」

藤田 進一郎 (関東学院大学)

合評会：柴田 有『教父ユスティノス』勁草書房

著者：柴田 有 (明治学院大学)

評者：柳澤 田実 (南山大学)、

鈴木 順 (東京大学)

司会：大森 正樹 (南山大学)

講演会：「数の学としての音楽 musica scientia matematica」

丸山 桂介 (東京音楽大学)

筆者は、いわゆる「裏方」の役割であったので、すべての発表を聴くことはできなかったが、以下筆者が聴くことができた限りでの研究発表の内容を紹介することによって、大会の概要を報告したいと思う。

大会第一日目のシンポジウムは、根占献一、大貫義久、加藤守通諸氏という日本のルネッサンス思想研究の第一人者によって行われた。近年のルネッサンス研究は「ルネッサンス＝人間理性のキリスト教からの解放」といった安易な理解を廃し、ルネッサンス期の人々が依拠していた中世以来のキリスト教的世界観の中で新たに捉え直されたのが何であったかを文献学的・実証的に明らかにしようとしているが、歴史学者である根占氏は、いわゆるルネッサンス期 (15 世紀末～16 世紀) に起こったプラトン主義に関連した歴史的事項を年表風に紹介しつつ、「ルネッサンス」という文化現象をどのように捉えるべきかについて参加者の眼を開いてくださった。この提題を承けた大貫氏は、ピコ・デッラ・ミランドラの有名な講演『人間の尊厳について』De dignitate humana の成立事情に言及しつつ、ルネッサンスの人々が拠って立っていた自然観を明らかにし、その根底に「人間が天使になる」などの東方キリスト教の思想が存することを明快に指摘された。三人目の提題者の加藤氏は、16 世紀後半の思想家で「魔術的ルネッサンス」の体現者であったがために異端とされたジョルダーノ・ブルーノ『英雄的狂気』の邦訳を数ヵ月前に出版されたばかりで、筆者は、ブルーノが後の時代の芸術などに及ぼした影響などについての発表を楽しみにしていたのだが、時間的制約のために、ブルーノについての発表は僅かに留まり残念であった。三人の提題者の提題はいずれも興味深かったが、筆者にとっては、「宗教改革者ルターがルネッサンスの思想家の著作を相当に読んでおり、彼らの人文主義的・文献学的方法を身に着けていた」という指摘が特に刺激的であった。「ルネッサンスと宗教改革とをキリスト教中世からの解放として対立的に捉える」という歴史観はすでに過去のものとなったといえよう。

二日目最初の研究発表「リルケと新プラトン主義との出会い」(水落 美也子氏) は、『マルテの手記』の著者として知られるドイツの詩人ライナー・マリア・リルケの魂の遍歴の流れを明らかにしようとするものであった。リルケは、ニーチェの「神の死」の思想の洗礼を受けながら、フィレンツェのルネッサンス芸術と出会い、フィレンツェの人々の精神の高みを「そこでは信仰は、権威への盲目的服従ではなかった」と称揚する。だがその一方、彼は、ボッティチェルリがサヴォナローラの排他的宗教改革に屈伏する姿などにルネッサンス芸術の限界を見てとる。そしてみずから「事物詩」Dinggedicht という形で新たなる芸術を作り出し『マルテの手記』などを執筆するが、「人間の感情を排し、事物

に語らせる」という彼の新しい芸術は、彼をして10年間の「詩人の危機」Dichterkrise へと追いやる。そして彼は、新プラトン主義との出会いによってこの危機を克服し『ドゥイノの悲歌』と『オルフェウスへのソネット』という二大傑作を発表する。--- 以上のリルケの精神の展開が、多くの詩の引用とともに感動的に示された。

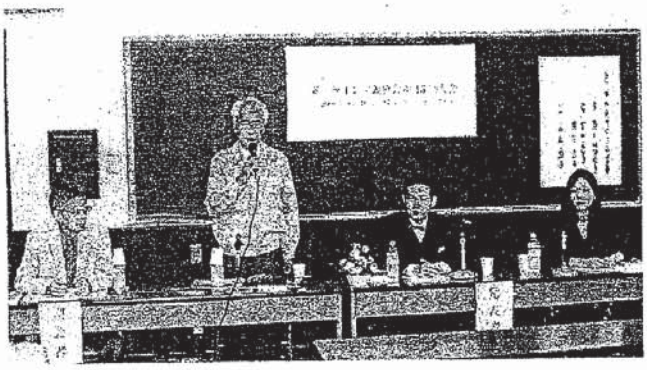
その後に行われた合評会は、キリスト教研究所の所員でもある柴田有教授(国際学部)の近著『教父ユスティノス』(勁草書房)をめぐるもので、柴田教授のほか、ニュッサのグレゴリオスの研究者である柳澤田実氏(南山大学)とポントスのエウァグリオスの研究者である鈴木順氏(東京大学)という若手研究者が濃密な討論を展開した。紀元2世紀に活躍したユスティノスは、キリスト教史中最も初期の護教家で殉教者であるが、彼は「完全な哲学(特にプラトン哲学) と完全な宗教との一致」を主張し、「ソクラテスはキリスト教徒であった」という有名な命題を残したことで知られている。合評会では、様々なギリシア哲学の学派を遍歴したユスティノスがギリシア哲学に満足できずキリスト教徒となった根拠が「個」(個物・個人)の問題にあったこと、すなわち、「知識は普遍的なものにおいてのみ存在する」と考えるギリシア思想の枠組においては、「かけがえのない個としての私を愛し見守る神」の考えや「ロゴスキリストの歴史の中への受肉」の思想が出てくることは不可能で、この点にこそ、ユスティノスがキリスト教徒となった根拠が存していたことが明瞭な形で示された。筆者は、紀元2世紀というキリスト教にとっては初期の時代に、ユスティノスがここまで鋭くギリシア思想とキリスト教との本質的相違を把捉していたという事実に驚嘆の念を覚えた。

最後に行われた講演「数の学としての音楽 musica scientia matematica」は、J.S.バッハをめぐるものであった。講演者の丸山桂介氏は、バッハがカントールを勤めていたライプツィッヒ聖トマス教会の門外不出のペリコペ (礼拝プログラム) を自ら筆写し、その記録をもとにカンタータを始めとするバッハの音楽の性格を明らかにした音楽学者であるが、氏は当日、バッハがもっとも愛した楽器であるクラビコードを自ら会場に持ち込んで当時の音を再現しつつ、バッハの自筆譜の随所に書かれている不思議な数字・記号の背後に隠されている「数」の理論、その根底にある神学思想、中世のユダヤ教の数の神秘思想 (ゲマトリア) などを解明してくださった。当時の第一次資料 (ラテン語・ドイツ語) を縦横に駆使した講演は説得的で、参加者一同がシーンとして講演とクラビコードの演奏に耳を傾ける姿は感動的ですらあった。筆者にとって特に印象的だったのは、通常「平均律」と訳される wohltemparierte (良く調律された) というドイツ語がプラトンの『パイドン』から来ているのではないか、という指摘である。ライプツィッヒの町の音楽監督であり、聖トマス教会のカントールでもあったバッハの蔵書は、彼の死後、神学書以外すべて廃棄ないし秘匿されてしまったが、丸山氏によれば、バッハが「天国」や「彼岸」のことがらを考えるに際してプラトンやプラトン派の著作を読み参照していたことはほぼ間違いないだろうという。筆者にとっては「バッハとプラトン」というふたつのものの結び付きは意外であったばかりでなく、キリスト教とプラトン・新プラトン主義との長く深いつながりを示すものでもあった。

以上が筆者が聴くことができた限りでの大会プログラムの内容であるが、この要約からだけでも、今回の大会がいかに充実したものであったかが分かると思う。事実大会終了後、多くの方々から「こんなに面白い学会だとは思わなかった」との感想が筆者のもとに届けられた。そしてその後、 7人の方が新規に会員となってくださった。大会のために献身的な努力を惜しま

れなかったキリスト教研究所教学補佐の石垣博美さん、黙々と裏方の仕事をこなしてくれた慶應大学・東京女子大学の大学院生・学部生の方々には心からの感謝を捧げたいと思う。またキリスト教研究所が、このような形で日本のキリスト教研究に貢献できたことを研究所主任として喜びに思う。そして最後に、今回の学会で貴重な報告をしてくださった幾人かの方々（柴田有、大貫義久、鈴木順氏）が本学の専任・非常勤の先生方であることも誇りに思いたい。

（みずおち　けんじ　　主任・文学部教授）



合評会の様子